淺間嶽
後編 執筆譚

へ遠13
2.009
1-5

特
門 ヘ 13
2003
巻 1

本清

執着譚序

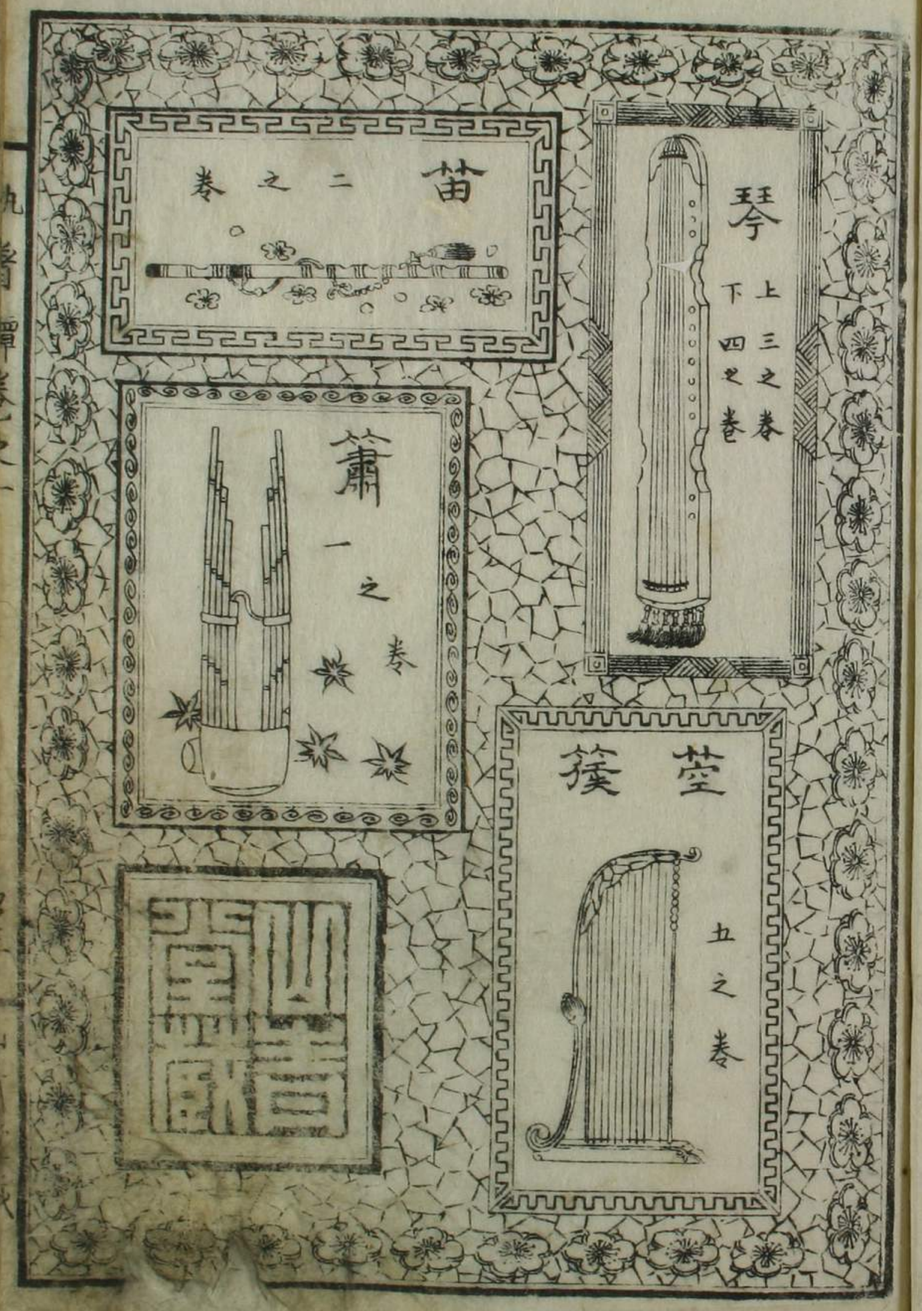
鏡花問水月曰。汝有耶無耶。水月曰。子是乎非乎。相與共歡。且賛秋曰。我倚勝乎。人以為有我諾。為無我諾。故假象發起煩惱。我以心識假我消入菩提。我以不諾。渾渾仕人之所捨焉。儒之一貫道。佛之一切智。口而唱不盡

而傳之何嗟嗟噴噴我脩勝乎功成而不居與
而不集德孰為雋無相子飄然至厲毒之曰
已矣乎今都下有柳亭者能以無為有以
有為無神變自在不可言說也近來所著
有執著譚五卷其化功必汝輩所及汝輩
誤而過言輒受後生之鬻也何二客相顧而不
知所為愕然而自失忽爾而消滅也
余假寐朦朧間聞此談如有所請退時
偶友人種彥排纂素出稿本粉老托序於
余余閱者熟觀之無相子之所採歷千篇
中因而煩佗語以所聞書於卷端以充
己責之科云

壬申春

臺茶道人題於松亭

〻西窓下



唐土台州清涼山石橋の圖

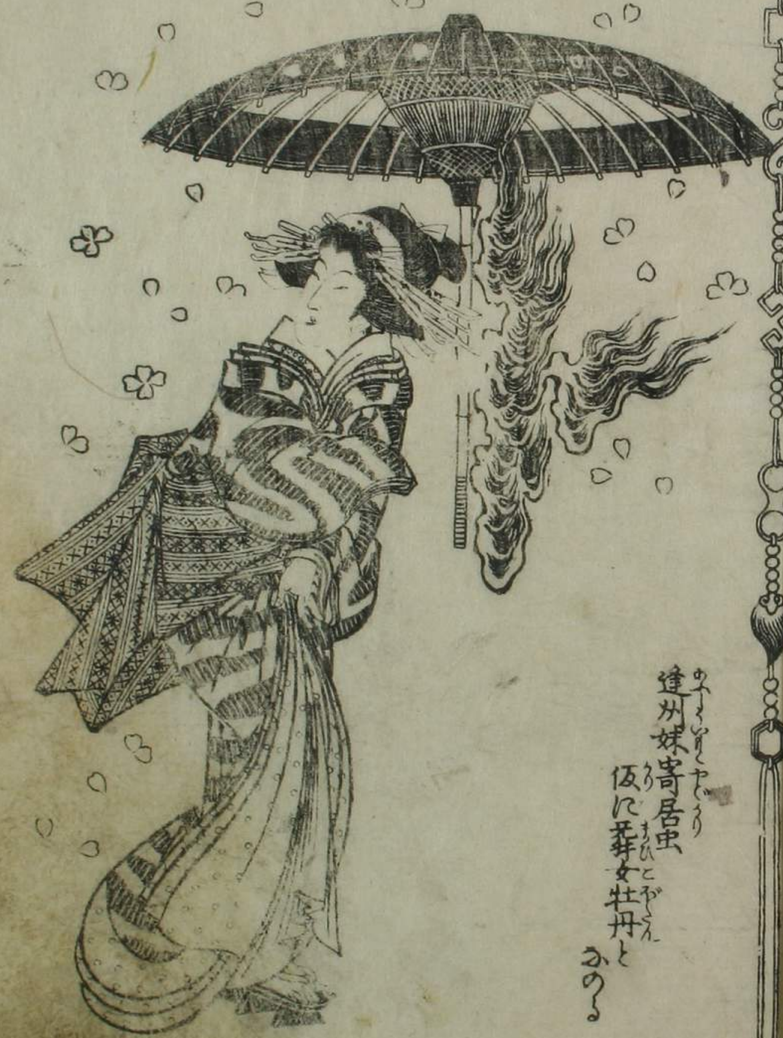
五條坂田字草の樓君
達州

生欲渡雖言死不志怨
亀未敵駐衣裳莫為
艶色尋常看義兼
堪勇壯主賜
題逢州　子歌

此歌ハ妓女逢州あるを客へ
盃をさすゆゑ口まうさみ
ゆるとそん

侠客 御所の五郎蔵

柳をまゝんとして花ごゝろ〳〵
多説に自害して汚名を雪ぐ
忠あり義あり
彼が不幸を
いんせん嗚呼



逢州妹背居虫
仮に華女牡丹と
かの〻

芭蕉十番
度々合傾城
ちる神や
さうめ先ぬ露れ
とちとさ為

三番

五郎兵衛女房に遊君
牡鶏花

拍子
切平

笠別執著譚

一名 宇朝長假寝

八卷 想因録

滅国後編

作者 柳亭 種彦

第一

巴人の遊花術につる疫さを乃一歌か娘
恋貝ふ兄ぐりあひ茶屋の信濃を沼る事

第二

男女平れ長いて笠別附鳥姉乃
心苦とふ沼行巻の髪麦根の風ふちふる事

第三

髪麦の方深夜に附鳥を殺害ふも
男波乃弟思ふに順くくさ沼さる事

第四

附鳥れ亡壹種この苦怪をわふ
髪麦 狂死沼ふ ぶろくぎぬ多の事

第六　巴ゝ亟蔔が洞の山荘に居を集め
　　細ち九に今て中楽桃枝を見行ふ事

第七　八席義士墓花を遠て墓門を敷
　　古蹟つふたゝひ乃仏をおゞ事

第八　窮居世ゝ仏の世ゝをうたふ
　　物招ぐ懺悔物語晴に世ゝ再舎乃事

第九　洗人ゝ家に良治為の小止を結神乙の
　　如ゝ弟ゝとゝく良治にはいづす事

第十　良治夢に清涼山よりおく石橋の物語
　　金色乃柳ゝ三牡丹の花くるふ事
　　窮居世又乃仏をうり古境の
　　威徳乃古蹟つゞ妖仏をゝぢく事

清涼嶽後編

執著論卷之二冊惣目録畢

山青堂

上
ゆふ天空てふたうきゝ乃のゝ山をかゝ様ゝのはけいせき
山にようゞけゞり驚浴乃鈴を振ゝやゞ里ゆ色
ゝろゝ乃物語そ地ハ燈の中ゝりでかゝりゝ
しくゝちけゞるゝふ別ゞゝすゞ名ゝり
かゝゝど乃年をゝゆむゞどくゝ見ゝるハさゝゞ
愛色廊にてゝるハ浴世へゝゝ少人
恨を恋色けさゝねどゝ乃ゝをゝ乃かゝりやせんと
ゆふたゞひたゝもん為のせい命をゝどかせ、煙を

かしこまる

中略 扨女乃地獄さりとてハ二方財中にたゝむきかゆ
之味線の撥を若しくハ三味線の撥を若しくハ三味線
きさはゞさたく熱湯をのむゞく其日れ酒宴歌は
多地相をハさをいのゝ地ものしかゝ様てゑ多だち
ちつけゝんつで拍ゝせんそ多ゝ公と公ゝりかけ
小ばゑかいゝう神ゝちかゞ
一ト振神乃ゝ見はゞゝれ甘くゝと

下畧

京外記節の逢州浅間が嶽懺悔の段ゝちをゝてふゝくゝう
そゝをゝゝる狂言ゝる

新著譚巻之一

間嶽面影草紙後帙

一 逢州執著譚

蕭巻

緯度著

第一

巴ゝ恋花街に到夜周一齋ゞむゝゝめ
忘貝にめゞりあひ茶道の傳書得る事

夫婦ゝ厭離ゝちゞゝゝ愛欲に軟しゝるゝ。人ハ愛欲のゝちに独来独去
し善悪変化。殃福異所なり。仏経にゝ魂ゝてゝりゝれハ愛欲執ゝ
ゝるの迷ひへつなるゝゝゝ生ゞる。目住ゝ想をゝゝ。おゝひ嶽ゝゝゝ
愛をゝゝ。愛感ゞゝゝ。遂ゝ躰を摩。體をゝゞへ憲通ゝ迷ゝ。ゝゝひ
ゝゝゝゝ畏をゝゝゝ。ゝゝに至ゝゝゝ死ゝれゞる。なゝ愛欲の冥路迷ひ
魂魄宙宇にゝゝゝゝゞ故ゝ。仮に姿を現ゞるもゝゝゝゝゝ。ゝゝ古ゝ

言ひくたやしる。花月逢別うかる類にやあアくん。さくも京都将軍義満公
八。往永和二年戊午の三月。室町の新舘に移徙ありてより。花の御所と室町
殿とも称じ奉る。于時宿領武蔵守頼之をたゞめ。聰明睿敏聖賢の矩に
かなふ。近臣衛中にもち。頻に四海外平し。ゆるく弓箭の塵をたゝいた
其うへ一莖九穂の登歳かり出る。花よめぐ月にうゝ出。花車風流を好
むものおゝく。田楽白拍子早歌催馬楽なんどゝりくゝ代こゝろ。
さきゝび都五条坂の曲ゝ。塾雨昔に倍し。歌楼妓館十字街にもちつゞき。
糸をまんゝべ竹をなし。娼妓舞女。袖をつゝねく。西と東にあさひつ。花
ゝゞべき容なるも。飄客のあしにさそはゝ。月と見るまと貌ゝ。玉簾の雲
よかくる。緋の日傘ゝ。烽雪の横るゝゝゝゞ。黒漆の弱下駄ハ去来を踏ゝ
とおどろく。是仙境と似るの慾界王と欺く白雪のあくれば消ゝ堅氷ゝ

霜を披月をゝび顆使のまげくゝ来る。拉人ハ氷を擔く井を填るがとく。
金玉おくる期ゆう愛情つくる期ゝ。遂と楽呼愁愁を生じ。方を亡まの
さゝひにやいゝゝん畏るべく慎べゝ。麦に浅間巴ゝ亟良治ハ永徳二年三月
のころ。陸奥牡鹿郡をうち立。都在番に赴れど。愛妾時々ゝ病ゝ
うちとのひ行くまゝ。古郷のゝ〳〵のゝまゝゝ。鬱結ゝ〳〵。公文に楽ゞ
斯ゝゝ呼吸ゝやすゝるゝんゝ。家臣のゝゝめにまゝせ。納涼にかゝちつゝ。炎夜
花街にいゝ。かゝる光景をゝゝゝ。積鬱を散じゝゝ。漫行の悪掘
等巴ゝ亟ゞ太刀の柄と袖をひきゝけ。會釈もなく攫ア。其上同子ハ悪掘
をゝび集ひ。飽まゞ悪はゝゝゝ。忍びての夜行なまゝ只ハ二三人の白
歯者のゝにくゝ。かゝる多勢にあゝゝがゝ。殆危くゝへゝるおゝゝ。所
の五郎花とゝ一個の侠客。六方ゞゝにあゝゝ来ア。悪掘を取ゝ投のけ。

巴と亟を背にかこひ金剛寺に立隅す。是おそ浅間やふぐ〳〵の居みく。
止夏かすきの方なり。武人よ妻れ寺〳〵奴等めべ一人も活く飯さと
罵ありれば悪掘ホン猫を見る紙のごく。仰地ともなく逃行り。時に武
花街にかすびるを。逢州とふ金盛の拵居あり。おりふぐも今の踊動よ
く。揚屋よ通ふ路ふふぐれ側に傍徨のくく〳〵おごろくけうひもうくを紅
の總角結びさびく。緩弦の国扇ふく。面ヨかる上埃をうち扇く居〳〵り
しふ今仲所の五郎孤が浅間の君なるとく〳〵ひつ式ゆとひと〳〵。蓮歩
軒〳〵うく〳〵。自巴と亟が手式とり。最尭ヨに付ふなど。懸懃に旁ヲ。落ち
〳〵扇畳帛を。秃をとく取あげさせ。五郎孤とうち連ぶちとある茶す
の桜よ登り。逢州のひタクホ。過刻に五郎孤をのひのを〳〵を歩行る仁居ホ
ちさ〳〵く浅間巴と亟良治公ふく在とぶ。そも行等由縁あるく。軽ぐ

まく。仆処よ到てのひ〳〵ふ仁巴と亟をかいふ仁ふ。
我名式ちふんと。ふ式祥仁問ひあちふ〳〵めんとやく〳〵ふり。花車一人走来ヲ。
逢州主ヤ暮ちさにふく急せのくと俗ふれが逢州ハ残多げに坐を古上ヲ。
式花街の風俗ふく。ち夫ち夢〳〵ちふち集ひ場屋ふりとふとの付ふ人ハ
ひせを仍れば暮かば妾が生敷よ詰ば。寛よかふりナさん。年頃今まつせ
〳〵。見タ式ふ〳〵ふ〳〵ぶり。ふ〳〵ふる風ふ。居式柳の巷にかびけんと微
笑古スちふ〳〵ふ〳〵に据式あつかく〳〵いそ〳〵〳〵く材子をふ〳〵ふれが巴と
亟さ〳〵仁不審ふれど。扨女〳〵ふひ。汝〳〵ふ我を深く敬人面ヲアかるか。
何等縁故ある者仁や。其夜ヲヤ語ア〳〵〳〵〳〵〳〵と問ひのくが五郎孤ハ涙を
ふ〳〵。前髪ヲ〳〵ひく面ぶふ。新宴ヲ姿とかふ〳〵。各式ヲ市所の五
郎孤とめ〳〵〳〵めつまふ仁ハ人ヲ宜かふ。若年の刻ハ君の側ヲ仍ひ。

頂法寺に詣でゝ、ひとつ入り給へば、巴御前、再び、おがろ〳〵されどこそ、何とやん面顔、
なんおぼえありといふ〳〵ぞ。其人なりとへ、志ゝ〳〵ぶ、巴に不角のおろかなりしが、
しくも我を見遣へば。過ぬ切に、辟奥の奴等を、退退け、危急を忽ち、ひしゝ。
三世の等級おくるゆへ、あやゝんと。隔なりさ言ふに、五郎藤ハ女めら
しくも、疾ゝ、やうれ。若気の花のあざ〳〵、公ゝ。西毋尼、遠山尼公の内侍女、拄節花
どのと、密通し。既に、待首を、刎らるべきと、遠山尼公の、内計
ひゝく、不思議、金ゝ、ぐのハ、し、陪恩、報ひ、なかるまじと
ゝ人に、甲斐なく、疾く、無常風、吹く。此世、去るひゝ、悲しき。斯今、四位
へ、ゝ、つ、ゝ、墓に、こゝ、清なし。朝、夕、ゝ、ゝ、折に、幸ひ、尼
都に、いるのひゝ、ゝ、風、少。露、大恩を、報せんと、金、呼、なし、寺、詣、ゝ、せ、に
一点の、赤ゝを、神仏、あつ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、不斗、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

つとなく異形とへかり仕へ又市所よりいへに因新開業花二宮太郎吉清掘わり
平平秋父重ちけなんど。鎌倉武士の名をかざり。大一大万二瓶子。三瓶の亀
甲或ハ花勅のうづびを染し。湯帷子をそろへ。侠客ハ悉小子にまつぐくとの
ゝかなとぶ。若や此夜歩行のおとゝもあり。ぶに供に俱せるゝ。夫ハそれ君成武茶
ちの狂門まゝ。せハ田字草の長が許に行ぐること。逢州こゝ。全盛の花魁うるが。
君よかれ〳〵逢ずいせさかんど。ゆうゝ小子文に不審さるこ。四仏当りと
行ゝやと問巳〳〵恵頭さとう。香我ゝ其度赤洋ありくどゝ。彼ゞ言美に今青我を
むくぐ。ねゞくんと言つまべ後ゝへ花来度のゝうハ知べゝと仔細よかるゝ万に
拝君一人行公なく接々のゞ。巳〳〵恵を。〳〵ゝ居ゝたてゝさなく去ゝたてゝ
なく。まゝ白なる面さくさゝのゞくく。紅梅つむ夾の雪のきゝとゝもゝりゝゝ面ゞり
ゝゝゝゞ侍ゝとべゝるゞ五郎義ゞ側よかゞまゝ居きゝ。巳〳〵恵ハ是ゝゝ仏をゝゞゞ。

杯よりつまる顔を熟とゝゝなゞゝゝゝ五郎義仗鉄にあゝ〳〵其頃ゝ母君も
いと使にまゝく。我ゝ汝ゝ前髪あゝゝゞ。斯二人ゝゝ面智ゝ幾投間ゝゝ疾へ
其日ハ我家にあゝく。洋のゝハ知ゝゞゝ。家臣星歌
士右馬つとゝゝ愚者。我恋のゝゝハゞゝ我ゝ恨にゝゝハ仗と杜鵑花ゞ密恋
祝所。常言にゝ吹毛さく剣にゝゝまべ已疵をゝるの邪。杜鵑花よおくる
教出紙落。三人育〳〵其席ゝゝ。ゝひくゝハ生〳〵二十ゝん母君の宣ゝゝるハ。
いまゞ角除ゝ妻をゝく。況や杜鵑花ハ待ゝゞけ夫さくゝゝゝまべ一ゝ美ゝ
〳〵不義にめゝゞ。更ゝゝ中とゝハ。天のゝゝゝる良縁ゝゝゝ。ゝ斯ゝゝと
ひゝゞゝまべ。若仗ゝ。ゝゝゝめゝべ往方をゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ
ゝ。密ゝ我ゝ宮ひ〳〵。ゝゝ徒ゝ六年めゝゝの夾秋を退ゝと。懐旧の涙ゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝ五郎義ゝ漫ゝめの悲〳〵。ゝゝゝゝゝゝゝ回答ゝゝ〳〵

ゆゝしき。巴ゝ亟憤然たる涙をとゞめ。ゆゝしく五郎義さゝみ歎そ今日こゝかゝるこゝろ。ゆゝしくあひつることそ幸都在番果くのち。四の老臣にも申えのゝち。陸奥にしばし。元の武士にこゝろゝくゝ仍さもんと言つゝも何度ゆゝんおもひ出さくゝもちゆ笑我なかゝらんと愚なる也のいひごゝろや。代変八今結ぶゝくゝ曇ゝ変ゝ移まゝゝ向ひゝゝせ。杜鵑花もいく使なるゝ。愛子ゝくゝものゝけゝやゝ風のゝゝ。五郎義側に座ある抜尼のゝ武ゝ。巴ゝ亟ゝ前にいぶゝのひゝゆゝ出るゝ面伏なるゝ。ゆゝめゝゝ。小子徒幸病よゆゝ。祚孤つゝゝく冷ゝゝく。彼逢州主とおゝゝ長田京草のゝゝ抜女に賣僅の金に弟をゝゝく。我妻にゝゝく妻ゝゝゝ代抜女ゝゝ杜鵑花がゝゝる果にゝゝと結ゝゝゝゝ彼抜女を熟見るに果ゝく杜鵑花ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ

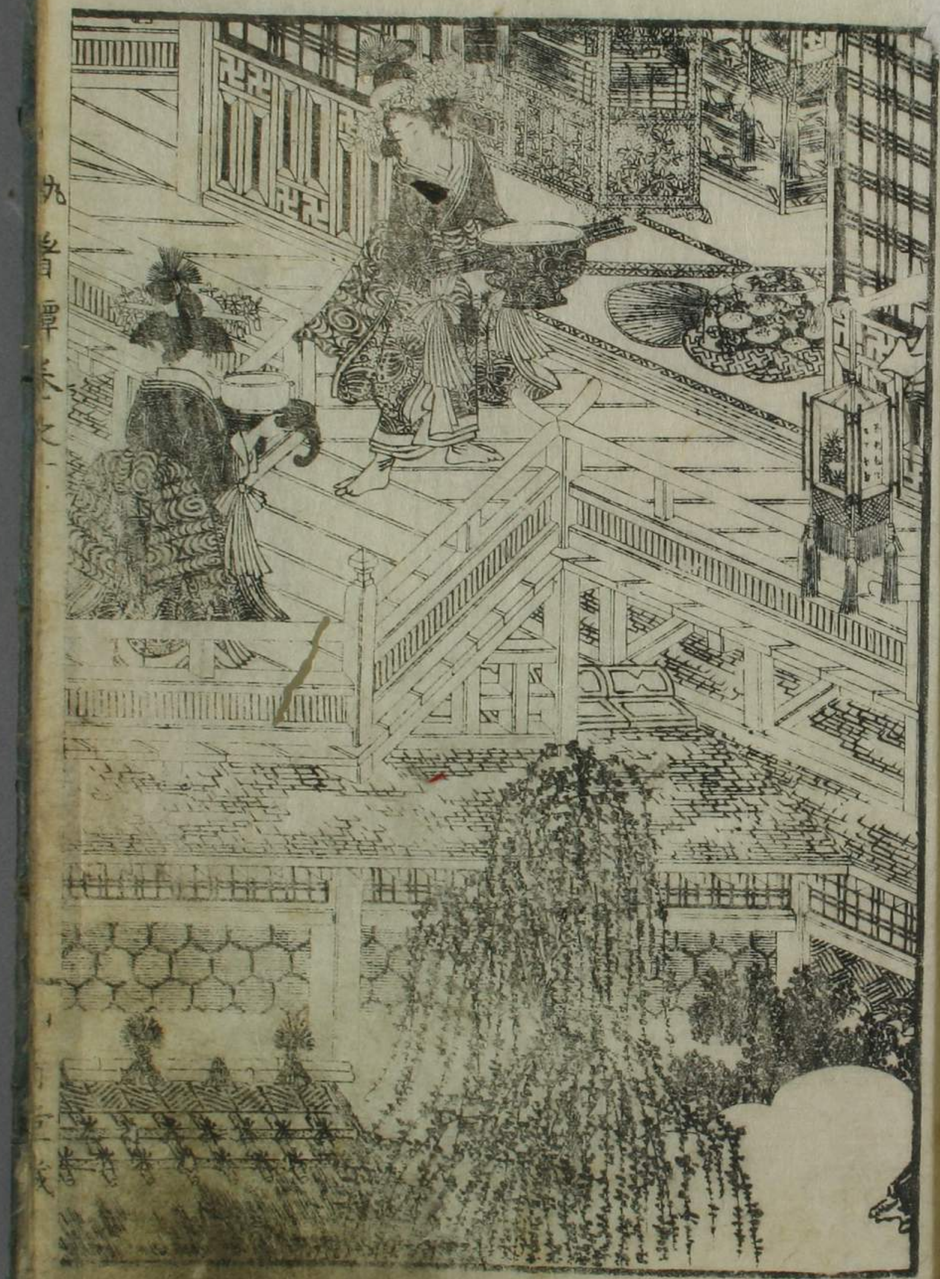
しく。実拵文不ど井戸のハ付ハ生して抱俗を立所花ハ目をりく言葉
をくそでめくをこび。ゑ〻も共ゑをえく。涙撥払ひとゝひよまぶ〻し君ハ乳乃
ひまぶをひ〻ひ〻ん〻と。拵里にいつりのひ〻ゐ〻ん〻に。ゑかくゝも志ゆりがちゆる
こゆ〻ゑ〻ん〻我ゑ〻〻泡ゆ〻ゑと。ゑ妓りろゝも聚を捫朗旅ゑるど見ひゑれば。
巴〻吸も陶ゑ〻ゑ〻ゑ〻

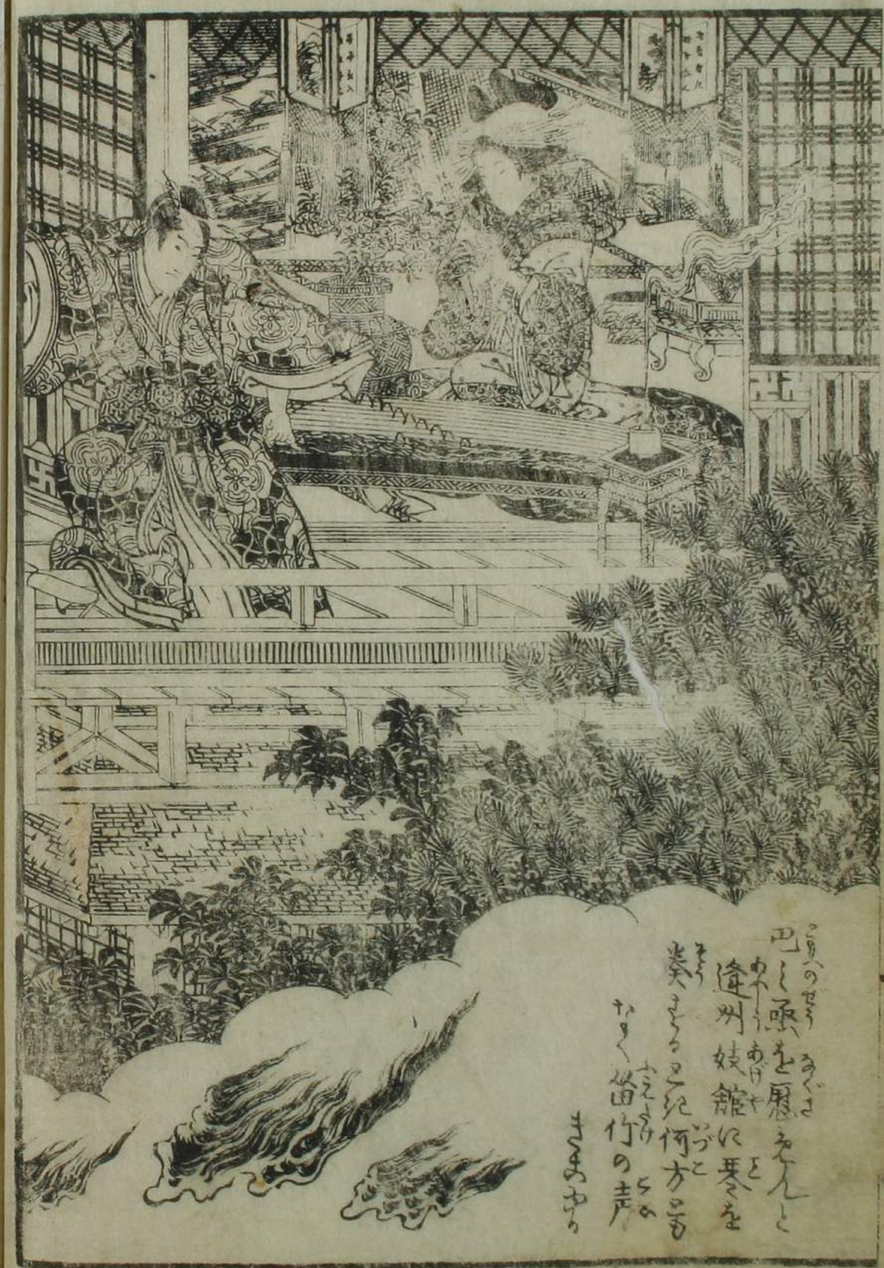
似て今まで花と見るは此花より白ひを見て壁に数の孔女と唯常盤木の
つゝかゝるゝどもやはりて逢州再び茶にすに来ぬ。さつべーそれとよく待ぬ。
老女と老女とぶ巷の外より残り。ふゝゝと衣のおとゝのひゝゝく搭に登り巴と亟
ぶ側近く居る。過刻にはせうまく。主人のやうにゆ〳〵へめげと先見人多人と。
手把よつめる巻物とおぼしきものの代さ一出せば探るー熟人ゝく巴と出大
におどろき是より我多年然らしまるとまうの。茶道伝授の秘きにして。奥
玉の園の一斉と言せしは則我茶道の師なり。此刀にてあるる品を
持りやと問に逢州は双眼より涙をうるめ。妾は一斉の娘忘見こと者にを仍
る。又一斉。君より多かる金をあづかりまいゝ也。銀より級ゝ盗賊に出金。
彼金を残ゝうくうぞひとゝ剰年病をうゝひ。其暁の星のうるもまゝ
あく月よも君のとゝ出にやかゝうんせうくく茶道の秘をかゝとさけまつとせ。

とゝうは罪を贖と。ゝとゝきはあるゝあゝ。未無月はおゝゝくゝは銀にまいゝん
ゝ。鬼や角あるは罪ゝゝ。ゝゝ出ゝ仲父ゝ。さゝゝの辛
国ゝゝ。遂にはゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。
贖ゝゝゝゝ。我ゝ一斉ゝ非命の死を哭ゝ。四を立退ゝ其昔斯と少
つゝ。ゝゝゝゝ

うち笑くに逢州の歎うちにも恥るしん。其ゆゑハいひのうへのこと。漸うち微笑。
無益同道しく。さぞ山の女ゝやなどゝ。其侍
しく。ちゝ君の方にうちあさのくとゝを。杜鵑花ハうかゝと盃をとりあげ逢
州主にも竹美ゝとゝしのんく。憂と打ひのみれとゝめつ。少時めづる盃に巳と赤
も大ゝ酔ぬ。逢州ゝ歎なるに山やうゝん看さう眼さう。憂と打ひのみ
を。杜鵑花ハ疾その山を推し。逢州ゝ連来ゝし拔くゝる老女にかくゝ
私ハかゝしひそまつ拔ハ歎く樓にのぐ。君ゝゝゝ花ゝ一夜ゝ
さんゝく。いゝのゝんゝん夫徒ゝゝん。縁にし深き逢州主のゝくに
いゝのゝ我ゝゝゝゝゝ。杜鵑花ぬしいゝゝとゝ。巳ゝ
山ゝ生ゝゝ言ゝゝ巳ゝ恋ゝゝくゝ言ゝ年ゝ言ゝくゝ流石面なく
き。大かげの歎をゝひけゝゝゝん斗ゝゝゝ。他のゝゝゝゝ。杜鵑花ハ山に

ゝ逢州ぬし。君を誘ひまのゝせ。ゝ言ゝゝゝゝを語ゝゝゝゝゝ。逢
州ハ歎ゝゝ赤ゝゝ。礼ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝ




四しく風を慕ふ人と
逢州妓館に琴を
奏でるこゑ何方ぞ
なりく笛竹の声

異國にありとかなる夜明簾とおもふ迄。高麗百濟のふーきにや衣桁にかけまとーくる往ハ九花帳とものひつべし。床遠梱に唐匣蓋竜香炉そじゆ。碁盤双六盤。貝桶追松ぐるま。文字くさう。花結びの類。りくわそびのくるまくさ。湯とのもなくもれるまくべ側に大きなる竹器をもて人最うるはしき唐曜麦試侍さうる。殺なく座廊に人のけつひしーく女童歌女うんど。数多酒肴を持ちでれば再麦よ酒宴をひらき。目刷さる歌妓ゞ弄ぢりにおりへども盃の数をもつ酒宴の興と見えてる式。扨節花そ生と紅づき。あるあんぐとも連代席を退出ぐう

其二

田字草ゞ長に く逢州時多姉妹の
名のり紙なと竹器ゝ曜麦恨風に散事

其夜も既に更ぬる。雷公遠くひゞに雲のくまぐまひ側ゆすぐ。雨さまーうち

そぞろ寒く程なく雨も雲ちりとおぼしく月光窓をうがち。袖ぶらげなる曲彔の
声さへ物がなしく少々ふけ。斯くて己れ須臾寥々の衾にまどろむ。眼をひらい
て枕辺を見まわす。遼州へ御に起こされ。楚風呂ものの手づから打扇く居さう
し。己れ魚が目さめしを見て。宛も三文もとられ。四文にも迫るべきに煎茶一碗
きめ〳〵さま。竹葉の酔をさまし〳〵ひねとさし出せば。仏ちゃげに吹終り。伊の人き
とおぼしなると序に己れ魚言ふゝ我年未不彼の老にかりひつゝ例女あり。名へ姓名
こゝ呼ぬ然るに此方の容貌彼女よりくも似ぬ。姉妹なりとの仇。彼ら空言と
言へ方にも妹ありやとうかゞきまべ遼州仏そね面ぶりしく。宮ふぶく一人妹も伝ひ
し。曲孫あり〳〵鼠賊とも異なきまべ妾に似もやうど。其時多方とやうんも。
行等の家の姫君にうくおハもとと問己れ答へ。彼へ高貴の御窓に成ぬしと
のよあるど丹波酒木の娘とうゝ徒師の娘ままと。彼四本のとゝ淀の夜ものの

晴まぬ。とうちぶくる徒己にく。実の父母へ付なる人とうとゝ成ぬ。其ひう
母へ病のひまもなく。姉と妹を共に世ーをふれにおぶくしと。伝ふ成少て遼
州へ稀ぬ。そのこにしあべ妾も。ちゝ出ぬとの伝る妹へ往しる中なり
と聞に少へ伝し。淀の夜叉の丸習ふ宮ふに。ぬ遠いど。妾が実の妹の方に。
澄授となるべき品なるまど。とうちぶくる後の妹に守袋へ毎夢祈とのふを
おさへて「その中にいまあり」ハ。ハ分の観音にやあゝんとうくて遼州忙しく居
ま成ぬ。つにしく去ろゝめとやうへ仕ぬ。その二形式不拘まる女の養駝
こそ伝るが実の父母と。本の娘が彼よ和がうり。さてへ方の妹にくあうけるうこゝ
うとなくゝるど打おどろ。美況とうねく。遼州へ声へり。狂ーかと
へ〳〵実の妹へ行地に住と。且夕ちゝ出せーが居のれ側に伝へし。皈らせのまを
ちゝへ妾のまへ住〳〵顔見せくれとうち伝へ己れ吻と吐息ーて。己れも

さこそおりゝ人どもに。表に一つの難美あり。れ冠に世ふるる侍なるまゝと我室醫書に云へ。
原雲上にたゝまちらひし女鶯なるが。天性公かゝまゝ。内もに愛さるゝ。
姫くおりひ。去年の秋三五の夜月見る庭にまねき。彼原東田人吾に旅
出雅云をまつゝざる代世出。侍るる女と示合。琴代きくべよおを弾よと
さまゝに責所。飽まゝに恥辱をあくしてあり。冠も五人連ゆゝ又いる
なる憂目やゝん。られ瞿麦を退んとふおりへ。時の大臣より師良公の女なる
べ容易ハそあゝ。其ゝ人時者も良夜に嘲せらるゝ。公気も弱ゝけん。遂
に病の床に臥面上に悪瘡を發。風の燈火草の高。きるに不ゞ代命ゝ
まゝすゝ。公の命殆止がゝ。むづくも華洛にゝおりもぬ。今ゝも冥途
の鬼とやなるつゝんが。我も出情ゝ。ゝねば待ゝさるゝとゝおるなゝと。
仔細ゝ拙がゝまゝ遊洲ゝなれたゝ。落涙のるにいひるゝ。世に妾ゝど寵

しゝ代りのゝ侍ゝ。浸の妹の寵居出ゝ行ゝ代ゝ。ゝのゝ。ゝなるゝべゝ。
ちゝ。色の水巷に水訓梓なゝゝの雫ゝ。袖ゝゝゝ揖ゝ。
の一夜のゝ。ゝ臥に。の妹の行方ゝ。ゝと。陸奥のゝの塩竈近ゝ。
雲井に急ゝ。冥途のるゝ。妾に泣とゝ言て
ゝ。ゝ。花街に来るゝ。ゝ。琴ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

[illegible]
例の言相左右に顔をうち一面の玉琴あり。其儀に水にちりうく接花の牙骨
螺細をちりばめ、後文機膝琴の文字あり。是幸と云おろし。逢州うまくに[illegible]
とりなしいつし出と爰無に拘つふ是度よりまつるに拙無のおりしれを失へ
ず。先孫爰雅振に歩す。費精に[illegible]とべーとしひ[illegible]逢州は退きかちにく。
天に手かふ是中とぞ。いとで三爰琴の帰工に[illegible]よりさべき頼く長一曲を奏しをる
ちぐろうせのくといふに巴〜恩徴笑[illegible]花街にかもれてくろう。そまてくの師に
むく琴に[illegible]を花をむきび。客に[illegible]むるを無とをいひつ[illegible]を忘れ
しやと言葉のうちに殆方かすく。報然とする顔をあげ下なきとに言ふ
くへ為伝ふ。花女のあさまーさへ唯燕なる曲のくつね。こすり。雅音ふいぐち
へうきえ声さ作る。そまへ形せよ形せよと。おーへくじふのろーぶーとるく。お調
作んとうぬくしげに染ろうみをーまーし燈に[illegible]むけまろうに調ふ撥あんせ。

ふに付つまてく深とさこけり。彼へ原雅乗堪能の家に秘さく奥義をさうへ。夫に
今ありとうろ巴へ調をうる利声なれば燕にしく陰声になるまで。巴〜返へ
撥を脇にもつ。少時歩をまのうち。狂雲河をかく。さくくと青さうに[illegible]
や傳出んと。ありさけとまぶ彩もうに青柳の涼しくかぜにゆらめく。板庇
をさらふのそあり。時に不思議や笛外のおと絶にまへ漸に近ようつ。
笠并にの外面に彷徨頼る琴と同声に吹あわせ琴へ笛へ琴にまさぐ。
琴へ笛にまさぐ。清雅正に響ぐ。音律うく合度清幽哀怨。程柏子とま
ずなり。巴〜巴へつく対をいまー。あー所や昔唐朝玄宗皇帝儒師とい
地の行成さくく。花仙笛をつくる。我そまにしなくく紀伊國和歌の浦なる弱竹
まく。横笛をつくとあ。男性となるべけ秘蔵せーが。彼笛の音によくも肖う。
何人なーん[illegible]。彩に[illegible]。炮竜をとう〜てしまぶ。二さもちもあうと

見ゆる手弱女。女童二人ひとり灯火を。留に添て。血をそゝぐ。地摺なりの両袖の。袂よ
夜風を含せん。紅袖飜く飄く。翠なる形勢へ。美女なんどの嫉きまどふさまを
あらぬ。あるべき世情やと目をたゝなすまもなく。折ふく雲ゆゑれ月いと冴く
てりまさり。燈篭の火影を吹まどはす。やゝ有て美人はかけ寄て。
せ一時ばかりぞ。あり名。己れ返天にもどろ。炮篭ろりおとせべきつと
なりて燃あがる。火影に此方も見あぐる高楼へ時ならぬ。さ宮ふ
敵なるやうこゝ。あるひるかけ。とと互に言ふ。ばかりく。やよ時者
ほとゝいふ。ぐ此巫女。来りしぞ。拘ゆるべきとも多なり。先此楼に登べ。と。
此仮ゝ見あぐ。とゝ。なり名。時者。異なけれ。冷うさなく。月新
隔つ見紙のわ。ぐ。場師が。かけ。階子を幸と雪なれ。曉を拾
ぐ。かるもちひ。ぐ。ゝ。刹。ちゝ。ゝ。ゝ。

又愛ぶべきことのあんなる。是なる遠州とかの桃尼が元我茶道の師。園ノ一斉が
ひまを。底見とかのふるひ。淀の夜叉に。おとづる実の姉なりと。世ノ人
不審かなる。中ごろ人なる人が姉上ふ姉にてあるうと例ちうく立ちう
しぶとおまりに見れば。実の姉妹なりとぶ。姉も妹もうるわしき形勢にて
笑ひかやくに位も中ごろ少時まりぬしが時もが婢娼なる粧ひに。心中私に怒
を生じ。己れ恨に對つて言ふ。時もの方とゆうんに去年の秋より病に臥り。
概をもあげずして。今ことの死やまうんるなど。宮ひにはひさかくに女郎
を見付るに。面痩せ衰へつゝ。曜しさまに天に色。ありに妾に妹のあると
を。杜鵑花ぬしに世ノ人に例室のそのうちより。娼ざまに見を撰ぶ。昂を
まうぬ面ぶりうるに。此形へとびとまうに。花よまでまに常盤木のいろも香も
なくさ妾ぶ姿。乳壓るうにいとねど姉妹のるのり此なるーやあとにくるうに

のりにんとに熟が思にうを。かくるとうにゆるさせ。いと不具に見えを生。
思に業にうぶに。時もが中まるに頓に恨なるうるに我も未洋ありふとまうなり
とかなに審に沈んとなるに袖を拭に時もの香のいるに徳娼婦白拍子なんどに
別に計策をもふけ。男ふの公紙にぶなるにとうに仲ノ付るかるに係を怨むるに唐音
うくてれんつふとうに手管に付りかん。淀様の一夜妻。花のちるに小
春ちう魂に蜘蛛と怪れてくに。彼灯蛾蟲をさうふ孫に心ちくるべいにされ飯鍛
を倦しめくとのふに遠州うち腹くち。夜ごに如るまうの彩あさ千一の刻
なりうるにそなるうるにのあるとうに。ふくに公にくに付ちにどるに書に機ある織婦
に浪に捧さまに。漢翁に客に横陳の娼婦に。活計なるまに徐さまに色。紅ちう
なるを好色ふに付に強に媚笑を献ぶ。色をもふくに推敲をとうんと計
にうへに。娼婦なるとに。妻ぶ少に最に付るちうとにあべなるさ二ふに付ちうに

夢ぬさまよいもとゝ。急ゝ狗いまづむ是ゞ。涙目にあふ是ゞ。身ゝ。
怒面よあゝゝ。是ゞ。巴ゝ。是ゞ。今ゝ。言葉ゝ。言ゞ。なく。有合姿見の鏡ゝ
ゝゝ。文車のゝ人にあゞ。遊州ゝ。ゝ。多ゝ。我のゝ。ゝ。世べ。不動對面
ゝ。互に寒ゝ。おゝ。ゝ。ゝ。此徒にゝ。ゝ。顔をゝ。姉妹ゝ
あゝゝゝ。其顔の肖ゝ。ゝ。ゝ。二人ゝ。疑念ゝ。ゝ。ゝ。
流石ゝ。ゝ。ゝ。一双の美人一時にゝ。ゝ。ゝ。其さまの有して異ゝ。
時多の原蓬せの家に成ゝ。ゝ。ゝ。既に良治ゝ。窺を得ゝ。ゝ。蘭
国に花咲をゝ。ゝ。桂殿に除餐をゝ。ゝ。車ゝ。ゝ。れば外戸ゝ。
奥ゝ。ゝ。れば傍門を出ゝ。ゝ。二八の頃ゝ。ゝ。ゝ。猜ゝ。ゝ。世
にゝ。是一ゝ。未通女のゝ。ゝ。止閑位なゝ。其行ゝ。ゝ。海ゝ。
繁を。ゝ。草流ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。袖衣ゝ。菊流を。ゝ。ゝ。

裕式穿ニ。ゝ。ゝ。の繻珍の帯。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

時鳥逢州鏡に
うつる顔を視て
筒井筒の昔を
おもひ姉妹の
名のり成るを

髪を掻あげつゝ憐べし。肌はさゆゝ痩さらうとのくども。野面に生し女郎花風よりもよろ〻風情にて。なす術おりむきあり。嗚呼かるとぶ〻紙翠ゞ行人々臭使袋の裏。三十六神の不伴ねあることゝ成まゝん憐べし慎べし。さくも逢州問屋の妻に続にうつる顔と顔熟〻ところちまりまゝび実に巳しく恋がつひしに遠つゞ肖〻やく花菖蒲つゞまゝところねかゝらぐみさてゝ実の姉妹ゝゝゞひよおどろく月合ときゝゞ。時雨ゞ指櫛をたてゝと続のゝゝにおとし。おさの紀時のゝゝさまをおもひ出ゝゝひゝゝに逢州どめとやゝんおまへが実の姉さまなゝゞ妾が三ッの秋のさろ。代続るやゝに井戸を飲ゝ抜びゝゝと紀茶ゝゞ坊主へさゝゝ塗櫛おとゝゝさゝのあり〻ゞ夫をおゞくゝ居のゝやゝ。おもひ出るゝと同ゞに逢州少時思案ゝし。妾はそろゝに三ッまゝやそつゝゞ夫を忘るべき。井戸の脊戸の小さゝ処。園栗のなる大み樹のまゝ。然もそゝみさの

おとゝゝゞ櫛に蛇田村の地蔵ゝ。廿四日の市のゝ紀爺ゝと連立ゝ姉が買ゝて貰ゝゝゝ紙。ゝゝゝさゝねゞゝゝねらゝく。やんちや言やゝくひつゝゝり。形に似合ぬ大ゝる櫛を。苦ゝ坊主へさゝゝゝゝえおとゝゝゝ井戸の水のゝゝ。ゝゝゝゝ月出ゝゝゞ。ゝゝ仮ゝす。妾ゝゝゝに仮ゝ居ゝ紙。切平ゞ賜ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ鬼灯花七ゝゝゝゝ。姉ゝゝに妾ゝ四ッ其方ゝ三ッ。むいて見ゝゝまゞ四ッゝゞ。姉のゝゝ虫が食ゝてゝゝく。やゝに〻ゝねゞ其方のゝを一ッゝゝまゝ。ゝゝゝねゞ明日ゝゝゝ平生のやゝに負て抜に出やせぬと。唱ゝてゝゝ歩いまゝゞ。逃る柏子に隠。片足泥ゝ踏こゝゝく紅葉赤の草履をゝゝゝゝ。ゝゝに紙おゞくゝゝゝゝゝゝに悪ゝく時雨ゝゝゝ。其夾おまゝゝゝ寺ゝゝゝく。おさゝゝ山のゝゝ本をゝゝゝゝゝゝ家ゝゝゝ裏ゝゝ。まゞゝゝけゝゝゝ発ゝゝけゝゝゝゝゝゝ

るいに知まるに居れどおさるるうてる女あるに女子なぜ言ぜでい此らぬそ夫
へ姉も老婆なすいとおまるへが此らまて彼妾い者しうおるしぶ入うとなるくくそ
勿体なすいと少ばまくいと遠州へ行に上るる和がう。日ちくぶりに泣出
しそのとまをおびくく居るまつ疑ひるない妾ぶ妹夫おうくくも居るろん隣
村の二五作の兄人都土産のおまるへ人形其方も妾ともらてさ兄美しう髪
結ふくくらの衣装ふぶうくるまくく妾おまるになるくるへと由緑もまくきど
にいひつぶ遂に曲中の憂つくるくるまるどうせくへ昔にくくへ今へ武角も竜
の多花車やまるへそのおくの。畏とうう強う逃へくまく猿の刃の果やとくべ
むくくなるくくやくに流歌べ所多も稍壁時演ようれ其おなげ見へとうう
なぶくくおさるれとくさのまるべくくまへ妾とくくかうるくくう鳩の車のる拵に
三枚の礼へ富まくくど。反浦の孝もつくくまねに百万度の月と日へ遂るめの

男にさしべるまくく悪しくくとおるひくる其姉上にあひながら空云なうとふうう。
拵女よ白拍子よてれんる鈴の空言と思まるまくくまるる。世界まくくまるの内
鼠むの使さゆえなるるおるひくくくく拵くくまるに叶上ふるに時多る。それへ動
せるくくうせるまくくくくくねくるの付べる言数くくのへまくくいへ遂州頭報妾る
鬱に拵くくまる。不良くくに世くえくくく。今くをなるくくへ面目なへ連枝に咲花くる。
反壬酉の恵にひくくに花くくまるるくくて瓶に侍くくくる。水のちくくくに笑くくくへ色香
異なるくくあく。侍女よおくづる。四同の愛妾と。亡八ぶりくくの拵女くくふるど
ひくくくに沸くべる。公隈なくくくに上へ姉に礼美を教くくべくと初のあくくへ
へにくくくく言ぶへ雅く姿へ勿体宛武へくくくへ或へなげるくくくる果べくくるへえ
ざるくへ四くくくへ悪くくへ花才ホる。歎へ宣なるくくへ是くくなくくくへくくへ縁云
なる。五にくくくくく

言偷まで仇逢外衛顔うちあげ。女へうろつ立言年裴なくて涙もろさが常なを
へ不意對面を。ぢぶとう外になり。悲歎に沈ばうんしうろ。母よ時も涙の夜井
の一条へ父の恵ぶりにく歩つまべ。問よおろぶまで失ろう以来つるる里に丸
をうせーや。それゆまるれーとへども涙に嗚咽頓に回答なすーつひてさまべ
ろや妾を捜しに行つるへ末の懶とふ鏡師ふぞちる。ものまねく素巡ほうど父上
姉上陰行方。知まれば住居る妾をさまべに言寛彼が古郷丹波國柏
原とのふとろへ将く眠す。実の娘と情めと。妻へ木の淵に仕くもやうぶと。ム
ねちげーせにく。母よと呼ぶ。何回ろ愛子を失ひ素性も知
まね他のるを連出くるものやある。顔ろうさへうとてーく怪まをうさられ
ろへ。答なるに疑のうちゆるまる。なるーく送る憂年月父の本の風ものどなく
光邪見の母のく一人ぶとなる。ろ紙涙諸に噴てうる是死んとなりいるいくそ

ふびその艱苦いべくるあるねども父上母上姉さまに逢遇んをちくく茶道
なるねるく知まなるー。後りまべきくく悪び生回くを流離ろう。如何くくの由
緒あるく。昌の恩ふけつるく。おるかけべ姉上に環金つ武上の頑にる
ろも双親にあるせくくべ今へ何地に在まるふくるる携きべ逢州へよとなるりこ
度ちづく治生るる涙ろうね児ムにるるおびへやせん母上へ元病ぐち又その上を方
の性方。ちきねべいとぐ公ムるつる。おるひをそうて亡人となりるひへ十年の
むう。又父上も妾が十三才とふ妾の中旬箇格くこのとあるくく人るあり
く果のふと歩問ろへ狂ぐく。そへ何と宮つそ父上も母上るる。ろやム冊成去
るひーとも。とへ何ぶせん妻ーや。ろくく他人を何方の孰かでどくく仏へ対るね
いひがひなるさムやと。練慶もム様感ろうへなれ悲しく。その人を知るどと
なる。紂ろるへ補ぎとる。一本刀恨まくくやる命ろ方をも惜まねど

取在ハさらに名残さ人知らねハ殆ハさなく。全念の月日をまぐ〳〵つとものゝ
ゝるを〳〵ゝ治るにぞ。時名ハ涙撫払ひ日惜さそのうへに又にあ〳〵さとやまく〳〵
ハ対ハ捺落に洗ハまぢめ。悪鬼毒竜と生をわん父の雖言吾身の仇夫彼
恨さそでやあるべきと。丈と斉さ思髪を右左へさとゆり乱し花の顔色朱
を洒ぐ〳〵と立く傍を顧。行器に揮しる瞿麦の花熟とうちまもりう
俤しげゝ莞ホとさ〳〵。あるゝ仏惰く〳〵咲つるゝ。あ花そふ夢とぬ〳〵ろ
なすさ。黄泉のあよゝ者ハ草と。なるゝハ誰史武花史ハいしゝあ〳〵の瞿麦年と。
柳の眉ひとさあげ〳〵ゝとさと目注に睨ゝまゝ寿を含〳〵生〳〵ゝる。花も
忽地色香をうしゝるゝ。そよとの風も吹なくに蛾とゝあゝに花散うゝ巴
恨逢洲ハ裕ゝゝ水を洒ぐ〳〵ゝ夜風骨にそゝんゝ〳〵めの寒〳〵しゝ花
さゝうなり。やあゝ〳〵やゝ時名父が非命の死を歩く怒気に堪ざるゝ性

あるに似つまゝ。ゝ対に雙あゝ〳〵ハ孫。そハ兎ま〳〵病愈〳〵祖母に
斯ハをつ〳〵ぞるゝ。又病ハゝとやゝせん。まゝハを定てゝと。逢洲ゝ〳〵
利ゝゝども。〳〵ゝ一言の恋ゝゝ涙潸然と。頃ゝ〳〵ゝ法居
ゝゝ。時に老板の板ハ行ゝゝゝゝん。命に〳〵〳〵首尾を歩ゝゝゝ
ゝゝをゝ〳〵ゝ。時名と顔見合せ。互にゝゝ〳〵〳〵ゝゝゝ
つゝ。あ〳〵怪ゝゝ時名が姿忽然とゝゝゝゝ惟一義の笛ゝゝ
〳〵逢州ハ不鬢阿呀と叫び〳〵走り来り。吾倩郷ゝ女郎の遺来ゝゝ
ゝ。二人の女童とうち集舎。寄貝ゝゝ居ゝゝが両国の墨ゝとゝ
ゝゝ。あゝゝゝゝゝ息ゝ〳〵ゝ面げに倍ゝ武歩。逢州ハ行ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ。ゝゝゝ妹ハ行方ゝゝゝゝゝゝ。妹ゝ時名ゝゝゝゝ外の方
ゝゝ一羽の時名楼へ飛ゝゝ。不如帰〳〵と啼やゝ。巴〳〵恋ゝ猿ゝ

不ぞうにおつるとうんそう。白木の位牌となりにろう慌しくとうあげ足まで
ハおつるとしんよ幕実結枯信女とぞ書るしう。さてハ彼黄泉の思となりとくハごち再
安婆のまぶかさを祝の遠州へとぶ姉なりと。我に書せしのなるっと思
ふうまつ涙まぶを。忙然ぞうく酔ふほどまのく遠州へ愛死のさるを
書くど。少時ハ言ても生さでアるう。惜れへ麻に人音しく。喘く走り来る
ものあり。是則我間の老臣雪枝林兵衛太が一子。同名小藏といハ若ち四歳へ
声を呼。あゝ仏りくなるやう汝ハ父林兵衛太をとるに囲のまるりに強くもれしが
斯あれどもく来つるに必定ふうれ故縁あるゝ。治をよ歩ハもうへとるる人
それがよるまぶとやの明るの庭が衛に病おりうるのへしあるる夜この若ハた
書くまを思びいうん会悲ふよ殺害るしく立退しう。君の羅化に異なる婦
人なるまぶ等閑になるぶくと。夜を日に次ぐく到着るし。君ハ花街に漫

ぶまるふよハ。故あるく歩。ぶるまるくおるう。五郎孫とるいくる道往者
者。提灯に君の役をもるしうるに祝こ。ハ桜に忍び居るべとうをもしとうを
ぶるに歩。まるくるや悲涙袖をうるし。我囲を出ることにとうもの香が外体
なるく人下とハるるうう。非命に死とべくとハまるぶりしやよ小藏に物の香ぶ
法号ハ華実結枯信女とハいハぎやとおるもるに君を書くるまるくるれ
れ。夫牌とおるまにおりと。手帀をひくるるとう出くる。ハ夫のるる
画のうちの空しけまぶ。うちのべとくぶうくく。大に赤どるに出囲の刺しるて
元時と分をるるまと。封とその手くるるるるとるるに
とぶのりにくく分祝くちぶ。そるるに書にまるぶ人小子を罪なるくるの人と完面
なるげにハんえるる遠州へ嚮とり涙にぶるるとを居るしぶつやるとよ小藏の涙と
やるん。あくくぶる受るのるそ。其位牌ハまをなるべくと役時香の化ーにる

位牌をさゝ生せべ小袖こ物入再おどろいたりしもまこゝ逢州天いふ人ゝ
妻入逢州とゝふ花君ゝ。門番の方こそ妻ゞ実の妹ゝ。ゝ伝る。角根こゝ
の縁故ゝ。姉妹の名のゝ生ゝ。ゝ生ゝ。入りおるゝ。あるゝ。れば代世ゝ
ゝ。ゝ亡夫の仮ゝ。ゝ。ゝ。